たましいの安らぎ　　マタイ 11:28～30

「疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。」主イエスキリストはわたしたちにこう呼びかけておられます。この言葉は呼びかけの言葉であり、招きのことばとも言えます。

そして、主イエス・キリストに「来なさい」と呼びかけられて、行こうとする時にハタと思います。イエス様のところに行くというのはどういう意味なんだろうか。何をすることなのか？　29 節で主イエス・キリストはこう言っておられます。「わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。」これは主イエス・キリストが 28 節で語られたことと、別の事をおっしゃったのではありません。「わたしのところに来なさい」という 28 節の内容の説明です。つまりイエス様のところに行って何をするのかと言うなら「わたしのくびきを負って、イエス・キリストから学ぶ」そのためにイエス・キリストのところに行くということです。ここで「くびき」についての説明が必要でしょう。「くびき」とは主イエス・キリストが生活しておられた地方で、二頭の牛を農耕に使ったり、あるいは、車を引かせたりする時に、勝手な動きをしないように、この二頭の牛の首のところに木または鉄で作った道具を、くくり付けて、二頭が一緒に動くようにするための農耕の道具です。

聖書の中には実際にその道具、「くびき」そのものの事を語っている言葉がたくさん出てきますし、またこの言葉をたとえとして使われています。たとえば旧約聖書の中で「バビロンのくびき」と呼ばれる言葉があります。これは旧約のイスラエルの人たちが紀元前５９７年、５８６年にバビロンに滅ぼされ、捕虜として連れていかれました。捕虜ですから自由はありません。そこから逃れたいと思っても、バビロンの支配の下にありますから、逃れることができない。奴隷の身分となり、働き、時にけなされ、低く見られる。そういう苦しみ、自由にはならないということを「バビロンのくびき」と旧約聖書は表現しているのです。イザヤ書４７章6節にはこのようにあります「わたしは、わたしの民を怒って、わたしのゆずりの民を汚し、彼らをあなたの手に渡したが、あなたは彼らをあわれまず、老人にも、ひどく重いくびきを負わせた。」このように聖書がくびきをたとえに使う時には、重荷とか、奴隷のように仕えるとか、苦しみとか、そういう意味で使っています。そこでこの主イエス・キリストの御言葉を読む時も「わたしのくびきを負いなさい」と言われると、ああ、バビロンのくびきを負うように重荷を負うことだろうか。何かイエス様のために、辛い事も辛抱してやっていきなさいと、そういう意味じゃないかと、思ってしまいがちなのです。しかし、それは全く違います。

実は「わたしのくびき」と言われていますこの言葉は「バビロンのくびき」と言う時とは、全く違う意味で使われているのです。イエス・キリストがおっしゃった「くびき」とはここではくびきというものの本来の使い方にそくして語られているのです。すでに話しましたように「くびき」というものは二頭の牛を一緒に動かすための農耕の道具です。「キリストのくびき」というのは、バビロンのくびきのように他人に負わせた、くびきではなくて、主イエス御自身が負っているくびきのことです。「バビロンのくびき」という時には、バビロンはくびきを負わないで、人に負わせています。けれども、主イエス・キリストが「わたしのくびき」と言う時は、主イエス・キリストが人に負わせるくびきではなくて、主イエス・キリスト御自身がすでに負っているくびきであり、そのくびきの片方に「あなたは繋がれなさい」と呼びかけていらっしゃるのです。聖書ではそれを「一くびき」と言っています。

「主イエス・キリストと一つに結ばれる」、そういう意味で主イエス・キリストは「くびき」という言葉を使っておられます。そして「わたしから学びなさい。」というのは、牛がこのくびきに繋がれて使われる時には、一方にはよく仕事に慣れた牛を繋いで、一方にはまだ余り慣れてない牛を繋ぐ。そうする

と、ちゃんと慣れた方の牛が、うまく行動しますので、もう片方の牛も、それにつられて、すべての行動が、慣れた牛と同じ行動になるわけです。ちょうどそのように主イエス・キリストと全く一つになって全く一つにつながって生活をしていく。そういう事をここで主イエス・キリストは「わたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。」と言われたのです。

「キリストのくび」きを負う時に私たちは今まで気付かなかった大事な事を知らされます。それは、自分はこんなに苦しい思いをし、苦しい目に会っていることを、誰にも分かってもらえない。そういうふうに思って嘆くのですけれども、実はそうではない。この私の負っている重荷、このくびきを主イエス・キリストが一緒に負ってくださっている。ですから「キリストのくびき」を負うということは、キリストが抱えている重荷を私がかつがされることではないのです。キリストのくびきを負うということは逆の方から見れば、私のくびきを主イエス・キリストが負ってくださっているという事です。その事に気づいた時に、私たちは「本当の慰め」を得ることができます。「そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる」と主イエス・キリストはおっしゃいます。「ああ、私は一人ではない。」主イエス・キリストが一緒にこのくびきを負ってくださっている。どこへ行ったらいいか分からないで、戸惑っているけれども、主イエス・キリストが私を義しい道に連れて行ってくださると、そういう事に気づかされた時に、私たちは本当に平安を得ることができるのではないでしょうか。

それだけではありません。主イエス・キリストと一つになる。これは、私たちの苦しみを主イエス・キリストが一緒に負ってくださる、助けてくださるというだけではなくて、言わば神様の救い全体にかかわる事だという事に気づかされます。主イエス・キリストは神様の御子です。ヨハネによる福音書の初めに神の子イエス・キリストが人となられたということが書かれています。人となられたのは私たちに近づき一つになるためであるということが書かれています。本当に人間と一つになるために、神の子イエス・キリストは人間になられたのです。人のすべてのことが分かるのです。人間と完全につながろうとなさった。そのために、私たちが生まれるように母親から生まれ、そして私たちが持っているこの肉体を持たれたのです。それで私たちがこの人生でいろいろ生活の苦労をするように、主イエス・キリストも苦労をなさいました。加えて、私たちと一つになったために、私たちの持っているすべての罪の責任を主イエス・キリストは、自分のものとして背負われました。私たちは神様に対して罪を犯しています。その罪を神様はお裁きなります。そうしなければ、神様の義が通りません。どんな悪い事をしても、目をつぶって、まったく裁きを行わないというのでは、神様の義しさがネジ曲がってしまう。だからどうしても裁かなくてはならないのですが、その私たちに対する裁きを主イエス・キリストが御自分でお受けになった。これが十字架の贖いです。罪のない主イエス・キリストがなぜ十字架におかかりになったのか、それは、私たちのすべての罪を身代わりとして負われたからなのです。これ以外に私たちの罪が赦され、救われる道はありません。そうですよね。いくら人の罪の身代わりとして自分が罰を代わり受けると言う崇高な気持ちを持っていても、人間はみな罪人ですから、すでに罪人である人が人の罪の罰を受けることは出来ません。罪を全く犯していない人、イエス・キリストしか身代わりとなれません。また罪の罰というものは確かな代償、犠牲が求められます。そこには必ず人間としての肉体的あるいは精神的な痛み、苦しみがあります。痛み苦しみの無い罰なんてありません。主の十字架の死はまさに人間が自らの罪ゆえに受けなければならない罰の現実の現れです。この人間が実際、十字架上で苦しみ死ぬということが無いなら、神様の罪の赦しとは口約束や独り言と変わりの無いものとなり、根拠の無い、赦しは私たちを何度も不安の中に落とされることとなります。

さらに主イエス・キリストは私たちと一つになってくださることによって、もう一つの問題から私たちは救われることになりました。その問題とは「死」についてです。人間というものは、どんな人でも必ず死にます。神の子である主イエス・キリストが十字架の上で殺されて死んで、墓に葬られた。そのすべては主イエス・キリストが私たちと同じ人間になられ、同じくびきを負われたために起こったことです。しかし、そのような死と滅びに向かっている者が、主イエス・キリストと一くびきとなることによって、もう一つの事が信じる者に起こります。それは主イエス・キリストが死人の中から甦られたことによって、私たちが甦ることができるということです。くびきでつながれているからこそ、主イエス・キリストとともに、主イエス・キリストに導かれて、復活できるのです。

主イエス・キリストの復活を信じる。永遠の命を信じると言いながら、私たちは身近の者の死に出会った時に、何かもう永遠にその命がなくなってしまうのではないかというように考えてしまいます。あるいは、自分が死というものに直面した時に、絶望的な思いをするのではないでしょうか。しかし「わたしを信じる者は死んでも生きる」「およそ、生きていて、わたしを信じる者は永遠に死なない」と主イエス・キリストは約束をしてくださり、そうして甦られたのです。主イエス・キリストは、人間になってくださり、死なれ、よみがえられた。そしてキリストのくびきを負う私たち、つまりキリストと私たちがつながっているからこそ、死に勝つことができるのです。

それらの目的を成就するために、主イエス・キリストはあえて人間になってこられ、人間の罪を負い、人間の死を背負って十字架の上で死んでいかれたのです。そうして、そのことを通して、私たちに永遠の命と神の子の栄光とをお与えくださいました。

今日の３０節「わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。」主が共につながっていてくださるくびきは、誰かから支配され苦しめられ、負わされる重いくびきではなく、主イエス・キリスト御自身が私たちと共に負って、学ばせてくださるくびきであるから負いやすいのです。そして主がくびきを負ってくださったことで、わたしたちの荷は軽くなるのです。「私のもとに来なさい」と呼びかけられる前まで、わたしたちは一人で荷を背負っていました。しかもそれは文字通り重荷、重い荷物です。しかし主イエスはその荷のことを「あなたの重荷」ではなく「わたしの荷」と主イエス・キリストは言われます。わたしたちと共にくびきで結ばれている主イエス・キリストはわたしたちの重荷を、共に背負ってくださっているのです。ですから共に背負う荷は、もはや重荷ではありません。

私たちの人生が、先の分からない暗い人生を一人で歩んでいるのではなく、本当に大きな輝きに満ちた約束を与えられている人生であり、その人生の歩みに、主が共にくびきを負って歩んでいてくださっているということをしっかりと心に止めたいと思います。

このくびきにつながること、これは、この主の救いと恵みを信じ、洗礼を受けることです。主の平安、主の慰めを欲している方々、「さあここに来なさい、休ませてあげよう」と、主は言われています。ここに主につながる喜びと幸い、恵みがあります。主は待っておられます。